

阿波公方列伝 (6)

9代阿波公方 足利 義根 (平島 又太郎)

文化振興課 森脇 佳代子

約270年間続いた阿波公方の歴史ですが、9代義根で区切りを迎えます。

義根は16歳の頃、家庭教師をつけてもらいました。その家庭教師の名は島津華山。京都から来た、まだ20代の若い先生です。彼は学問に秀で、人間性もとても立派、皆から慕われるすてきな先生でした。義根は華山先生のことが大好きになりました。そして先生に儒学や漢文学を教えてもらいながら、先生の学者仲間・友人知人たちをたくさん紹介してもらいました。

やがて父8代阿波公方 義宜が亡くなったため、義根が跡をつぎ9代阿波公方になります。先生の教え方が上手なのもあったのでしよう、義根はめきめきと漢詩の腕を上げました。時には華山先生といっしょに京都や大阪に遊びに行

よしね

義根 (平島 又太郎)

き、有名な漢詩の先生や学者さんを訪ねて交流を深めることもありました。その中には漢詩の大御所や名高い大阪の学問所懐徳堂の先生もいました。一方、阿南の平島公方館にも徳島県内の多くの学者や文化人たちが集まり、皆で楽しく漢詩をよむ会を行ったり、交流会を行ったりしていました。義根は、こうした京都の旅や気の合う仲間同士の語らい、また那賀川や青島、西方山／津峰山／七浦山といった阿南の景色も詩によみましました。これらの詩は義根の漢詩集「棲龍閣詩集」(阿南市指定文化財／阿波公方・民俗資料館展示)におさめられています。

ただこの頃、徳島藩との間にトラブルが続いていました。阿波公方は室町幕府將軍家という立場から、徳島藩の家臣ではなく、藩主の特別なお客さんであるという扱

いを受けていました。しかし、以前からこの取り決めに不満を持つ11代徳島藩主 蜂須賀治昭から「今後は、今までのような特別扱いができない」という、とても厳しい言い方の手紙が送られてきました。13歳で藩主についた治昭もすでに40歳代、自分の意志で政治を行う藩主に成長していました。

義根はこの手紙にひどくショックを受けます。そして長い長い反論の手紙を返信すると同時に徳島を出ることを決心します。義根の意向を知り慌てた藩は「今、徳島を出て行ってどうするんだ」とひきとめる手紙を送りますが、彼の決意が変わることはありませんでした。

文化2年(1805)、表向き理由は病氣療養のためとしつつ、義根たちは家臣、その家族を引き連れ、総勢12艘の船で徳島を出発しました。義根一行は、那賀川町の中島港を出て和歌山を経由し、最終的には足利家ゆかりの京都に腰を落ち着けます。京都には足利家と縁が深い天龍寺、等持院などの寺院があり、また親族の公家たちも住んでいました。以降、名字を「平島」から「足利」に戻し、子孫たちは代々京都で暮らしてきました。

令和の現在も、その血筋は途絶えることなく続いています。初代阿波公方 足利義冬から数えて15代目、また足利尊氏から数えると29代目である足利義徳さん。室町幕府足利將軍家の嫡流にもっとも近く、足利尊氏からの血脈を受け継ぐ「平島公方家」「平島足利家」として、また「全国足利氏ゆかりの会」特別顧問として活躍されています。

今回、阿波公方列伝は最終回ですが、阿南市には当紙面で紹介しきれなかった阿波公方の足跡が多く残されています。阿波公方が信仰対象にまでなった「まむしよけ札」、阿波公方一族、島津華山のお墓や、邸宅の門、公方一族が建立した石灯籠、書や漢詩の数々、地域のお祭や逸話など、その内容と範囲は多岐にわたります。遺構は残っていませんが、阿波公方・民俗資料館の場所は、まさに平島公方館が建っていた場所、地名や地形から当時をしのぶことができます。(完)

※7月号からシリーズ「阿南市の先覚者たち」を再開します。

問い合わせ

文化振興課 ☎22-1798